

1. 二葉旭町保育園から二葉くすのき保育園へ

二葉くすのき保育園は、42年前の昭和52年に園舎の老朽化に伴い、新宿から現在の調布市国領町に移転してきた。その前身は大正5年の二葉保育園分園であり、さらにその前身は明治33年1月10日に麹町で始められた二葉幼稚園である。幸い戦禍にもあわず焼け残った新宿旭町の二葉保育園で昭和23年12月29日に認可を受けたことから二葉くすのき保育園の戦後が始まっている。

(1) 二葉保育園二代目園長「徳永恕」先生のこと

徳永園長は大正13年から新宿分園に住まわれていた。大正末期、昭和初期という最も社会事業の必要とされる時代に、徳永園長によって新宿旭町保育園ですべての指導推進がなされてきた。また、戦後は新宿旭町を本園と呼び乳幼児の子どもたちとその家族に関わる戦後復興再建事業の多くを徳永園長のもと、新宿旭町保育園を主軸に行われ、乳児院、養護施設の発祥の地としても重要な役割を果たしたのである。徳永園長は、明治、大正、昭和の三代にわたり、その生涯の情熱を貧しい人々の救済に捧げた。多くの恵まれない人々から「母」と慕われていて、常々「世の中は一人の幸福でなしに全体の幸福でありたい。そういう意味で、本当に信じあえる平和な社会を作りだしたい。そのためには、一人一人が真実の生活を通して助け合っていかなければならない」と言われていた。

保育の仕事に於いても「子どものうちにこそありのままの真心の心がある。何としてもこの子どもの真実性を伸ばし、子どものときから清い住みよい世界に住ませたい」と願っていた。いったん知り合った人はいつまでも忘れず、離れ去ってもそむいても、その人の幸せを祈り続けた徳永園長は、人を愛するために生まれ、かつ生きた人であった。

(2) 福祉が公の仕事として位置づけられて

戦後、昭和23年児童福祉法が施行され、福祉が公の仕事として位置づけられ保育園も公費のついた措置児として子どもを預かるようになり保育環境もずいぶん改善された。昭和30年代は社会福祉事業の発展と共に働く保母や従事者の待遇改善の面でも大きく発展した年であった。保母たちが童謡を歌いながらデモ行進をしたことは、社会福祉運動の歴史にも特筆されている。一方で日本社会は高度経

済成長の時代に入り、急激な都市化それにとまなう自然破壊や人間疎外など複雑な問題が渦巻いていた。昭和42年当時、「ポストの数ほど保育所を！」と働く親たちの要望のもと、たくさんの保育所が作られた。二葉旭町保育園では、徳永園長の「困っている母と子を助けるのが保母の仕事です。要望があれば、1月1日でも保育します」「今、世の中で困っている人を閉め出すことはできないんです」という弱い者の味方になり共に苦しむことをいとわない精神で、保育に困った人が助けを求めてくると、園長の一存で受け入れることもしばしばあった。職員は「いい保育がしたい。いい保育をするためには自分たちも元気に働きたい」という思いがあり、待遇改善を求めて徳永園長と対立することもあった。それでも職員たちは、徳永園長がこれまで積み上げてきた「子どもと親に寄り添う保育」の二葉の精神とよりよい保育を求めて無駄と思われるほどたくさんの時間をかけて話し合いを重ねた。クラスの仕事を個人の仕事として背負い込むのではなく、組織的な仕事の一環として保母集団の積み重なった実践や討論の上に立って安定した気持ちで保育ができていった。保育に見通しをもち、教育を計画的仕事として組織していこうと努力した。

(3) 零歳から6歳までの年齢幅に共通した保育目標

保育園の子どもたちの生活について、保育内容を全面的に見直すことになった。従来の一斉保育の行事中心ということや日課の中でも朝の集会や食前の挨拶にしても形式的に流れているのではないだろうか、などを検討し、大人の愛情を素直に受け止める信頼関係のある日常保育、もっと子どもが自主的に行動する「あそび」を中心に考えることなどがとりあげられた。零歳から6歳までの年齢幅に共通した保育目標として、「よく食べる」「よく寝る」「よく遊ぶ」を定め、昭和46年から「わらべうた」を導入した保育になっていった。幼児クラスでは、課業を6つに分けて（体育・描画・環境認識・数・文学・わらべうた）その中で子どもが頭も体も使うように中身を検討した。昭和44年に隣接の大同ビルが建設され、旭町保育園は一層ビルの谷間の保育園となり太陽を求めて野外保育に出かける回数も増えた。建物の中でも使用室を変更するなど、最大限の努力をしたが、20年近くになる木造園舎は、年々の補修費が嵩むばかりで、徳永園長は都知事に会ったり厚生省に出か

けて何とか緑の多い新宿御苑の一部を保育園に使用させてほしいと申し入れたりした。

徳永園長が昭和 48 年 1 月 11 日、19 歳から 85 歳まで、明治、大正、昭和の社会事業、保育事業に尽くし永眠されたこと、また前々から太陽のいっぱい入る代替地を望んでいたことなどが新宿旭町の地を去ることのひとつの契機となった。園長は三代目堀越信子園長となる。遂に移転改築を決意し、ちょうど調布市国領町に都営の調布くすのき団地ができるに当たって保育園計画があり、高層団地の保育園建設を決意し、大正 5 年以来の歴史をもつ保育園の地を売却し移転計画を進めることとなった。ただちに職員の中に建設委員会を設け作業にかかった。保育室の広さ、空間、給食室の広さ、図書の一部、大人の休憩室、園庭の空間作りなど子どもも大人も生活しやすい環境を作っていくために話し合いを重ねた。

2. 子どもの育ちと環境づくり

三代目園長堀越信子と共に、昭和 52 年 4 月「二葉くすのき保育園」がスタートする。3 年間は高層団地内という特殊地域で職員一同設備環境に慣れるのに必死で保育を行ってきたが、ようやく自信を持ち地域からも理解と信頼を受けるようになったので、昭和 55 年第 1 回の公開保育を調布市内の公私立保育園の職員を対象に行った。そこでは大きな反響を呼んだ。

(1)「子どもたちにとって」を第一に考えた室内環境

保育施設的环境として、南側に子どもが使う部屋を、北側には職員の使う部屋を設計した。旭町時代の職員達が研修に行き学んできたハンガリーの保育施設などを参考に話し合いを重ね「子どもたちにとって」を第一に考え設計されている。背の小さい子どもには輻射熱で足元から温めることを大切にするという観点からその当時では珍しい床暖房が設置された。またホールを作らない分、保育室を広くした。子どもたちが様々な遊びができるようコーナー作りが出来る空間にした。0 歳児クラスでは「受け入れ室」という空間を広くとった。保護者が送迎時に授乳をしたり身支度をゆっくり出来るように、また、大きい人と空間を分け感染症等の広がりを予防する意味での隔離空間としても保障された。受け入れ室はどの部屋にも設置している。また、玄関や受け入れ室には季節を感じられるような園庭の草花を飾ったり、その日に遊んだ遊具を置いて忙しい保護者が少しでもほっとする気分になってもらえるようにしている。また壁面を利用して絵画を飾ったり、観葉植物を置いて子どもも大人も心が落ち着

く環境づくりを心がけている。

(2) 保育室にあふれる手作り遊具

保育園において子どもの生活の大部分を占めるのは「遊び」である。子どもは遊びの中で情緒や創造性を育み、身体の発達を促すことができ、遊びを通して様々なことを学び、成長していく。そのためには遊ぶための時間を保障すること、遊びやすい空間を作ること、年齢や季節にあった遊具を選ぶことなどを考慮し、その子の居場所を守ってあげられる環境を整えることが大切である。くすのき保育園では 0 歳児クラスから子ども一人ひとりが「自分です」という気持ちを育てていけるように、遊具を扱う子どもたちの発達段階を見極め、興味関心に合わせていろいろな手作り遊具を作っている。市販されたものではなくその子の発達に合った手作り遊具はその子にとって大きな成長を促し、クラスの雰囲気も柔らかくしてくれる。子どもにとって遊具は単なる物的条件としてではなく、大人が直接子どもの世話をしたり、話しかけたりすることと同じくらい子どもの成長を助ける温かいものである。

(3) 安心して遊べる園庭に

国領に移転してきてからくすのき保育園の名前の通り、園庭の真ん中にある大きな楠の木とともに歴史を刻んできた。二葉くすのき保育園は都営団地の 1 階にあるため園庭は横長である。新宿から移転する際「子どもの外遊びの空間」を考えた時に乳児、幼児の身体の発達や動きを考慮して園庭を設計した。その結果、乳児庭・幼児庭を区切りそれぞれの外遊びの時間・空間を保証できるようにしたこと、砂場での遊びがじっくりできるように 3 か所作ったこと、乳児庭には歩行の安定を促すために築山を作ったこと、各保育室の前には芝生を植え土ぼこりが直接室内に入らないようにしたこと、幼児庭には子どもたちと一緒に野菜を育てる畑を作ったことなど子どもの成長、発達に見合った空間づくりをした。しかし、時代の流れとともに周辺環境も様変わりした。木々も大きく生長しマンションも建設され日照時間も少なく風通しも悪くなり土壌も砂まじりで固くなるなど環境も大きく変化してきている。「園庭改造」も何度か試みて試行錯誤を繰り返してきたが現在、モットーとしていることは「1 年を通じて子どもたちが園庭でたくさんの自然と触れ合えるようにすること」に落ち着いた。

(4) 自然体験が豊かにできる園庭環境づくり

平成 18 年に二葉くすのき保育園の 30 周年記念行事が行なわれたことがご縁でグリーンアドバイザーの資格を持つ元保護者の方を中心とした園芸グループの 4 人のメンバーで結成された「ローズマリー」

の皆さんに多大な力を借りながら二葉くすのき保育園の園庭を一年を通じて子どもたちがたくさん自然と触れ合えるように、そして子どもたちの遊びが豊かになるようにと一緒に作業や手入れをしてよりよいものとなるように活動している。園庭にあるたくさんの樹木や草花は子どもたちの遊びの対象になっていて摘んだり木の枝をくぐったり、登ったり隠れたり、自然物を使って遊べる庭となっている。0歳児クラスの小さい人にとっても抱っこされて眺める庭の花の色、小鳥の声、温かくなって匂いを運んでくる春の風、芽が吹き出した木々からこぼれる光、そういう感覚的なものを感じられる庭となっている。園庭にはクラスごとに小さな花壇と畑がある。花壇には春は菜の花やチューリップ、夏はひまわりや秋にはコスモスなど四季折々の花を植え季節の移り変わりを感じることができるようにしている。畑には毎年夏野菜と冬野菜、いも類を植えている。2月から畑を耕し、園で作った堆肥と肥料をすきこんで土づくりをしている。野菜は種から育て、収穫だけを目的にするのではなく、様々な発見を促して季節を感じ水やりや雑草取りなど子どもとともに作業をする中で、土に触れ、植物のにおいを嗅ぎ、生き物もたくさん発見し、子どもたちが自然の面白さを感じることも大切にしている。

(5) 保護者と共に

父母会の活動は旭町時代から積極的に行なわれていたがいつ頃から始まったのかは正確にはわからない。しかし、かつての園だよりによると保育予算を求める行動に職員と共に参加したり、子どもたちの保育環境を整えるためにバザーをして資金を集めたり「保育園を支える」活動を様々な形でとりこんできている。また「食品公害」や「公害と健康」など自分たちをとりまく環境について学びたいという学習意欲もとても高かったようだ。このことはくすのき保育園になってからも受け継がれ1年に1～2回、保育園と父母会と共催の学習会がもたれている。すでに卒園して保育園を去ってからも置手紙のように貴重な言葉を残してくれている。「子どもが育つのと一緒に親が育つ過程が保育園にはある」「くすのきらしさって、派手じゃないけど子どもたちのためにこめられた思いを大切に受け継いでいることかなとおもう」と。

3. 一人ひとりの人格を尊重する保育

二葉くすのき保育園の保育内容は、旭町の頃から二葉の精神とよりよい保育を求めて話し合い、これまで実践と見直しを積み重ねてきた。建物の老朽化を機に、子どもたちにとって良い環境を求めて調布

に移転、ハンガリーの研修旅行での学びを設計に生かし、子どもたちにとってどういう環境・保育がよいのか、自由な発想で創造して保育をつくることを大切にしてきた。その根底には、「すべての子どもを一人ひとり大切に作る保育」がある。

(1) 「自分は大切にされている」

保育園は子どもにとって家庭よりはるかに大きな集団であり、家族構成・家庭環境、そこでの体験全てが異なる子どもたちが生活する場である。保育園で過ごす時間は長く、特に小さい子どもは保育園の環境を受け入れ安定して過ごせるようになるまでには時間がかかる。乳児クラスは特定の大人との強い結びつきが必要であり、育児担当制をとっている。入園後、担当保育士を母親に代わる一番身近な大人として保育園での一歩が始まる。乳児期はひとつひとつの生活習慣をその子なりに身につけていく時期である。生活の流れは次への状況をいつも同じようにつくっていくことで、子どもを待たせず、せかせせず、大人は一人ひとりその子らしいやり方を助けていくことができる。次に何をするのか見通しが持てるようになり、それはやがて個々の行為へ自身で参加していく姿に繋がっていく。保育園の自分の部屋を知り、自分をとりまく友達がいる。好きな遊具や楽しい遊びが待っていて、困った時や悲しい時、体に異常があって苦しい時は助けてくれるやさしい保育士がいる。保育園にくることを楽しいと思い、一緒にあそぶ友達を思いながら、進んで保育園に来る子どもの姿を願いながら日々保育している。

(2) さまざまな人間関係が生まれる

二葉くすのき保育園では、平成9年度より年齢別保育から3,4,5才児の異年齢混合保育を実施している。時代と共に核家族や少子化が進む中で、子どもたちが少しずつ変わってきている(自己コントロールできない、ささいなことが原因でトラブルが発生しやすい、友達とうまくかかわれないなど)ことが話題となり、約3年の準備期間を経て実施に踏み切った。

そこに至るまでには、他園への見学、研修参加、職員会議での議論を重ね、保護者への理解を求めるために説明会や懇談会を行い、不安や意見に対して丁寧に対応してきた経緯がある。異年齢混合保育の中では年齢、性、発達の違う子どもたちが3年間同じクラスで過ごすことになる。(卒園・進級で一年ごとにメンバーは変わる)その中でさまざまな人間関係が生まれ、個人のふるまいや態度が育っていくとともに、その子の位置も少しずつ変化していく。それはその子の情緒面を豊かに、そして自信に繋がっていく。家族とは違う集団の中で、自分を知り、受

け入れることができるようになると、自分のできないことを他人に助けをもらい、自分も他人を助けるという関係が自然に生まれてくる。この中で、子どもたちの自己評価と自己像の形成が促され、社会性が育っていく。

4. 「わらべうた」で育つ子どもたち

現代の子どもたちの日常生活にあふれている音楽は、音程やリズムが難しく、子どもたちにふさわしいうたとは言えない。子どもの情緒が豊かに安定して育つために「音楽」は必要不可欠なものであると同時に、子どもの知的発達、身体、運動機能の発達、社会性の発達など、発達すべての面に大きな影響力をもっている。

(1)なぜ、わらべうたをうたうのか

二葉くすのき保育園では、旭町時代の昭和46年より「わらべうた」を音楽として取り入れている。かつて、三世同居が普通だった頃には、祖母から、そして母から、わらべうたは歌い継がれてきた。愛情をもって歌われる素朴な歌やあやし言葉は乳幼児にとっては、何ものにも替えがたい貴重なものである。日本の民謡やわらべうたは、世界でも珍しい特徴がある。一つはものすごく音程の幅が狭いこと。そしてもう一つはわらべうたの数がとても多いということ。日本のわらべうたは「レ・ド」という二つの音が基礎になって出来ている。この「レ・ド」という2度の音を中心としたわらべうたの節（ふし）というのは世界でも珍しい。古いものほど旋律に半音進行がみられないといわれているが、子どもたちがわらべうたの中でも半音のないもの、少ないものからうたっていくことによって、子どもの聴感により確実に、より敏感に発達させることができる。

(2)うたうように話し、話すようにうたう

～乳児のわらべうた～

0歳から2歳までの乳児期は、大人と子どもが一人ひとり向き合って、触れ合っとうたうことを大切にしている。小さい子どもにとって「ことばはうたうように話され、うたは話すように語られる」のであり、大人の表情や身体の動きも一種の“ことば”“お話”“信号”でもある。大人に抱いてもらったり、膝上に座って手を握っとうたってもらうことで、大人の表情、声の響き、鼓動をからだ全体で感じることができるようになる。やがて、自分自身も自然にのびのびと体を動かし、声を出し、笑うようになっていく。うたのなかで、子どもたちはたくさんの言葉に出会い、想像し、発音しようとし、大人の言葉、動きを真似ることで、言語・身体機能の発達もすす

んでいく。

(3)音楽が好きになる～幼児のわらべうた～

わらべうたをすることの大きな目的は、乳児期の年齢と同様、子どもたちが音楽を好きになることにある。また、音楽的能力（聴感とリズム感）を発達させるために3歳を過ぎる頃から段階を追って系統的に方向づけるために「課業」を計画し実践している。運動発達、言語発達、ルール感、対人関係などの基本的な発達は幼児期に育つといわれている。

現代の子どもたちは、子ども同士が面と向かい合って遊ぶことや、生活の中で体を動かすことが減ってきており、幼児期までに育つと言われてきた基本的な発達の獲得が遅くなってきている。また、子どもあそびの中で、一人ひとりの違いを感じるからこそ、ある時にはぶつかり合い、またある時には協力し「素の自分」を出しながら仲間として成長していく。友だちと関わってあそぶ中で、多様な感情や関わり方、コントロールの方法を経験して学んでいくことが成長の過程でとても大切である。わらべうたは子ども同士が向かい合い、触れ合っあそべる貴重な機会になっている。私たち大人はより細かく一人ひとりの状況を見て的確な助けをしていく必要がある。

(4)保護者にも伝えて

二葉くすのき保育園では、ここ何年かで人と人との関わりに少しずつ変化がみられるようになってきた。大人と大人、大人と子ども、子どもと子どもが直接関わる時間が少なくなってきているように感じる。それは生活が忙しく、関係をもつ機会が少なくなってきていることや、電子機器の普及も関係しているのではないかと思われる。そこでせめて親子で触れ合える場として、楽しさが沢山つまったわらべうたを保護者にも伝えたいと、数年前から年に一度、“わらべうたであそびましょう”会を実践している。日頃、保育の中で子どもたちにうたっているわらべうたを、保護者にも沢山うたって覚えてもらいたい、家庭の中でも子どもと触れ合ってもらいたいという思いで企画している。

5. 子どもたちに安全で望ましい食事を提供する

保育と給食は深く結びついている。食事は子どもにとって一番の関心ごとである。朝から「今日のごはんはなに？」と聞いてくる子ども、また機嫌の悪い子どもに給食の話をすると機嫌が直ってしまうほど「食べること」は子どもの活力、エネルギーにつながっている。また、帰りがけに子どもが母親に「きょうのごはん、美味しかったよ」と給食のサンプルを一緒に見ながら話をしている姿をよく見かける。

子どもの「おいしい」の一言が何よりも嬉しく、励みとなって給食室の仕事を支えている。乳幼児期は色々な食材や調理法を繰り返し経験していくことで食材の味を覚え、その後の嗜好形成に大きな影響を与える大切な時期である。保育園には2ヶ月の子どもから6歳の子どもまで幅広い月齢の子どもが通っている。この変化の大きい6年間を保育者+給食室で一つの役割を補い合っている。

(1)食の安全を心がけて

子どもは消化機能が未発達であり、これから細胞の数を増やしていく時期である。身体に害のあるものも早くから取り込んでいくことになる為、小さな子ども達が口にする食べ物だからこそ地産地消、国産を使用するなど「出所のはっきりした食材を使う事」が大切であり、二葉くすのき保育園では「子ども達に安全で望ましい食事を」をモットーに開園当初から「食の安全を心がけた食材で給食を提供している。残留農薬、食品添加物、遺伝子組み換え食品、輸入食品、食を取り巻く環境は不安がいっぱいだ。また子どもたちの「食品を選択する力」を養う意味でも保育園では安全なものを選択する責任がある。

(2)当園がこだわっている食材

- ・牛乳…北海道の広大な土地で『遺伝子組み換えではない飼料』で育った健康な牛から搾った乳
- ・米…長野県産無農薬あいがも栽培米こしひかりの七分づき米
- ・魚・肉…近隣の商店から国内産に限定した新鮮なもの
- ・野菜…国内産で厳選。特に根菜類は放射能の影響に配慮し、九州方面の産地に限定している
- ・調味料・乾物・菓子類…化学調味料・保存料などの添加物を含まない安心安全な自然食品を厳選
- ・果物…国内産に限定し毎日納入

(3)子どもの発達にあわせて

子どもは口腔機能や内臓器官が発達途中のため、その月齢、年齢に適した調理をしていく必要がある。当園では離乳食は初期・中期・後期・完了期の4段階で個々のペースに応じて進めている。段階ごとに保護者にも試食してもらい確認しながら進行している。また、乳児期は1日の食事を4回食と考え保育園では午前食と午後食と2回の食事を摂っている。その後1回の食事とおやつに移行する。食事の内容が変化していくと同時に食器や食具も少しずつ変化し発達に合ったものを提供している。近年、食物アレルギーの子どもが増加しているが保育園では入園時の面接で保護者からの聞き取りをする中で可能な範囲で除去食・代替食を提供している。また給食の献立内容やおやつなど、アレルギーの心配が

ない食品を提供している。

(4)食べるのだいすき！

今子どもたちの生活は「早寝早起き」や「朝ごはんを食べる」など乳幼児期の成長発達に必要なことがだんだん出来なくなってきている。育ちの根幹が揺らいでいるとも言われているが、保育園では子どもの育ちの真ん中にある「食」の営みを通して発達を保障していけるように保護者に働きかけたり、子ども達と話し合っただけで食育にも取り組んでいる。幼児クラスでは「授業」の中で「野菜について」「お米について」「魚・肉について」を主なテーマにして体験学習を実践している。「みて・さわって・においを感じて・味わって」を実体験できる事は大変貴重なことである。また園庭で季節の野菜が育っていく過程を観察したり成長を楽しみにしながら実った野菜をまさしく採れたてを食べることができる環境が整っていることも子どもたちにとっては幸せなことである。「ほいくえんのやさいはあまい」という子どもの声は毎年聞かれる。

(5)保護者の関心も高く

玄関にその日の給食・おやつのサンプルが置いてあり、お迎え時は親子の触れ合いの場にもなっている。盛り付け方、いろどり、分量などじっくり観察している。行事食の時は特に歓声が大きい。幼児クラスでは保育参観の日に食事と一緒に摂ってもらい感想を寄せてもらおうと「出汁がおいしい」「薄味にびっくり」「食材の切り方が参考になった」などの声が寄せられた。子どもに人気のメニューはレシピを配ったり「給食ノート」に意見、感想を記入してもらおうこともある。やはり、子どもも大人も「食べること」が大好きなのだ。

(6)給食室は大忙し

給食室の朝はまず大きな鍋に“かつお”“宗田”“ムロ”“昆布”を使用した出汁をとることから始まる。出汁の旨味と旬の野菜や魚が持つ旨味の相乗効果を引き出し、豊かな味覚を培う土台として薄味に調味している。各クラスの食事時間に間に合わせる為に調理を分担し人数分の食器を準備して黙々と手を動かし空気が張り詰めた中で息つく暇も無いほど働くことを毎日繰り返している。そして子どもたちの「これがおいしい！」「またつくって！」の声が励みになっている。